

# 「今昔物語」と「發心集」

——直接的關係の否定——

築 瀬 一 雄

本稿に於ては、『今昔物語』と『發心集』の所收説話の類似してゐるものを比較して、兩者の間に直接傳承の關係があるかどうかを考へてみたいと思ふのである。先づ調査の對象となる條々の一覽表を掲げておく。〔發心集〕の欄の漢數字はその卷數、洋數字は全卷の通し番號である。)

## 〔發心集〕

## 〔今昔物語〕

(一) (1) 平等供奉離 <sub>レ</sub> 山趣 <sub>ニ</sub> 異州 <sub>ニ</sub> 事	十五、十五、比叡山僧長増往生語
(二) (1) (5) 多武峯僧賀上人遁世往生事	十二、三十二、多武峯増賀聖人語
(三) (2) (16) 三河聖人寂照入唐往生事	十九、二、參河守大江定基出家語
(四) (3) (29) 讃州源大夫俄發心往生事	十九、十四、讃岐國多度郡五位聞 <sub>レ</sub> 法即出家語
(五) (5) (55) 中納言顯基出家籠居 <sub>ノ</sub> 事	十九、十六、顯基中納言出家受 <sub>ニ</sub> 學眞言 <sub>ニ</sub> 語
(六) (6) (63) 證空替 <sub>ニ</sub> 師 <sub>ニ</sub> 命 <sub>ニ</sub> 事	十九、二十四、代 <sub>レ</sub> 師入 <sub>ニ</sub> 太山府君

(七) (6) (66) 母子三人賢者通<sub>ニ</sub>衆

罪<sub>ニ</sub>事

祭都狀<sub>ニ</sub>僧語  
九、四、魯州殺<sub>ニ</sub>隣人<sub>ニ</sub>不<sub>レ</sub>負<sub>レ</sub>過語

(八) (7) (84) 惠心僧都隨<sub>ニ</sub>母<sub>ニ</sub>心<sub>ニ</sub>

通世事

十五、三十九、源信僧都母尼往生語

(一) 平等供奉離<sub>レ</sub>山趣<sub>ニ</sub>異州<sub>ニ</sub>事

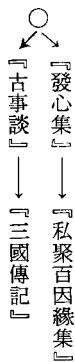
この説話は、『今昔物語』・『發心集』の他に、

○『古事談』第三僧行、平燈爲<sub>ニ</sub>門<sub>ニ</sub>臥<sub>ニ</sub>事

○『私聚百因緣集』卷第九ノ第十五、平燈供奉捨<sub>ニ</sub>名利<sub>ニ</sub>往生スル事、

○『三國傳記』卷第九ノ第廿一、平燈内供發心事、

にも存し、その間の關係は、



と見るべきものであり、(註一) この兩系の同祖的位置にあるもの

が求められなければならないが、『今昔物語』を直接之にあてることが出来ない。『發心集』・『古事談』に對比してみると、『今昔物語』の記載は、次の如き相違を示してゐるからである。

(1) 人物が平燈・淨眞でなく、長増（名祐律師の弟子と記す）・清尋となつてゐる。（註二）

(2) 伊豫守藤原知章が、清尋供奉の爲に別房を作つて、之を尊敬した記事がある。

(3) 長増と清尋との對面談話が詳細である。（他では、言葉少なに立去つたとか、返事もせずに立去つたとか記す。）

(4) 「其ノ守ノ任畢テ上テ後三年經テゾ」再び門乞匄が現れて國人の尊敬を受けたことが記してある。

(5) 長増の歿後、この事は讃岐・阿波・土佐の國にまで聞え、五六年に至るまで國人法會をなし、「此ノ國々ノ人ヲ導ムガ爲ニ佛ノ權リニ乞匄ノ身ト現ジテ來リ給ヘル也トマデ」語り傳へたことが記してある。

これによつて見ると、『今昔物語』の記載と他のものとはかなりの相違があり、『今昔物語』から直接他のものが出たと云ふ風には考へられない。その關係は間接的であり、傳承の間にかんりの歪曲や省略が存することを認めなければならない。

## (二) 多武峯僧賀上人遁世往生事

増賀の傳を記すものは頗る多く、その記述の出入増減については、別に考察する機を持ち度いと思ふので、『今昔物語』と『發心集』との比較についてのみ云ふと、先づ『今昔物語』に存して

『發心集』には見えぬ事項として、

(1) 生後數月にして關東に行き、落馬した話

(2) 其夜母の夢に佛國所生子、我等加衛護と佛の告を蒙る話

(3) 四歳の時叡山に上り、一乘法を學ばんと願ふ話

(4) 自ら僧供を受ける話

(5) 冷泉上皇に召されて、拜辭する話

(6) 多武峯に登り勤行のこと、弟子のこと、及び南嶽天台等諸祖を夢みる話

(7) 金剛印を結んで示寂した話

を擧げることが出来、逆に『發心集』に存して、『今昔物語』に見えぬ事項として、

(1) 藤原詮子に召されて、拜辭する話

(2) 佛教供養の時、施主と口論した話

(3) 内論議の時、僧のものを食つた話

(4) 根本本中堂に千夜詣つる話

(5) 慈恵僧正の爲に乾蛙魚を帶して、瘦牝牛に乗り、前驅となつた話

等を擧げることが出来る。又兩者に共通するものについても、例へば、『發心集』に、

此の聖人命終らんとしける時、先づ碁盤を取寄せて、獨碁を打ち、次に障泥を乞うて、是をかつきて、小蝶と云ふ舞のまねをす。弟子共あやしむで、問ひければ「いとけなかりし時、此の二事を人にいさめられて、思ひながら空しくやみにしが、心にかかりたれば、若し生死の執となる事もぞ有ると思つて

とこそ云はれけれ。

と簡単に記すものが、『今昔物語』では頗る詳細になつてゐる。かくして、『今昔物語』と『發心集』との間の直接關係は、この條に於ても認めることは出来ない。

### (三) 三河聖人寂照入唐往生事

この條を比較してみると、『今昔物語』は概して詳細であり、『發心集』は簡單であるが、兩者の間に直接傳承を認めることは出来ない。その理由と認められるものを、一二あげると、先づ、『發心集』に存する、

笙歌遙聞孤雲上、聖衆來迎落日前

雲の上はるかに樂のおとすなり人や聞くらんひが耳かもしの詩歌が、『今昔物語』にはなく、ただ「此ク他國マデモ被レ貴ル、也ケリト語り傳ヘタルトヤ。」と收めてゐる。

次に、本妻と相まみゆる條が、『今昔物語』では、

其ノ後寂照京ニシテ行キテ知識ヲ催シケルニ、一ノ家ニ至タリケルニ、呼ビ上テ疊ニ居ヘテ、美饌ヲ儲テ令レ食ムト爲ルニ、簾ヲ卷上タル内ニ服物吉キ居タリ。見レバ我が昔シ去ニシ妻也ケリ。

とあつて、偶然のことの如くに記してあるが、『發心集』には、我が道心は實に發りたるやと心見んとて、妻のもとへ行きて物をこひければ、

とあつて、自主的な動機づけをしてある。

かうした點から見て、兩者は直接するものとは思はれないので

ある。

### (四) 讃州源大夫俄發心往生事

この條の説話内容は、全く『今昔物語』の範圍内にあつて、或は直接傳承と見てよいものかもしれない。(但し、これは結論的には否定すべきである。後述参照)ただ行文が、『今昔物語』の方に修飾が多く、『發心集』の方は筋を主としてゐる點に、取り扱ひ方の差が見られ、又最後の所で、口より生じた青蓮花を、『發心集』の方は、

此の花をとりて、國のかみにとらせたりけるを、もてのぼりて、宇治殿にぞ奉りける。

とあり、『今昔物語』の方は、

住持此レヲ見テ泣キ悲ビ貴ビテ、口ニ生タル蓮花ヲバ折り取ツ。引モヤ隠サマシト思ヒケレドモ、此ル人ヲバ只此クテ泣泣ク返ニケリ。其ノ後何ニカ成ニケム不知ザリケリ。

とあつて、相違するのである。

### (五) 中納言顯基出家籠居事

この條の内容は『今昔物語』の範圍内にあり、順序も同様であつて、或は前後傳承したものと見られるかもしれない。(但し、これも結論的には否定すべきである。後述参照)その行文を比較すると、『今昔物語』の方に修飾の多いことも例の通りである。

又、『今昔物語』に、

上東門院ヨリモ雲深キスマヒ心苦シクナムト、常ニハトヒ御

シケレバ、後ニハ大原ノ奥ニ栖テ、貳心無ク佛道ヲ行ズ。  
とあるのを、『發心集』に、

上東門院より問はせ給ひたりければ、

世を捨てゝ宿を出でにし身なれ共猶戀しきは昔なりけり

とぞきこえ給ひける。後には大原にすみて、二心なく行ひ給ひけるを、……

と云ふ風になつてゐるのは、『後拾遺和歌集』卷第十七雜三に、

後一條院うせさせ給ひて、世のはかなくおもほえければ、法師になりて、横川に籠りゐて侍りける頃、上東門

院より呼ばせ給ひたりければ、

前中納言顯基

世をすてゝ宿を出でにし身なれども猶戀しきは昔也けり

御かへし

上東門院

時のまも戀しきことの慰まば世は二度もそむかざらまし

とあるものなどを、適當に攝入接合したものだと思はれる。

## (六) 證空替師命之事

この條に關係ある説話十一種(註三)を蒐集して、その間の關係について、やや詳細に考察を加へたことがある。(註四) その時、結論的に、

一、『今昔物語』の如く、晴明の呪術説話を主とし、之に身代り祈請を接合したものが、最も原流をなすらしい。

二、第一次の展開として、身代りモチーフの確立を示す『證空繪詞』・『發心集』・『寶物集』が位置づけられるであらう。こ

こに、母子訣別の挿話も現れたのであらう。

三、『三國傳記』は明かに『發心集』を承けてゐる。そして部分的な相違はあるとしても、説話相の變貌と見るべき程のものも存しない。

四、『園城寺傳記』・『寺門傳記補錄』・『元亨釋書』等もこの第一次展開の階相を示すものである。そしてそれが文學的表現を必要としない種類のものであつたので、とかく筋のみが略述せられる傾向を示してゐる。

五、第二次の展開は二様に分れて、一は『曾我物語』、一は謡曲『泣不動』となつた。それらが何を直接の典據とするかは判然しないが、兩者の間に接觸の無いことは明かである。

と述べておいた。即ち、證空身代りの説話は、その展開に於て、かなり多様な様相を示してゐるのであつて、その間の傳承もある程度までは之をたどることが出来るのであるが、その頭初ものは、かへつて明確なる決定に困難を感じるものである。

『今昔物語』と『發心集』との相違の顯著なるものと云へば、

(1) 『今昔物語』には太山府君祭のことがあるが、『發心集』には之がない。

(2) 『發心集』には不動の繪像に祈ることがあるが、『今昔物語』には不動の身代りのことはない。

(3) 『發心集』には證空の母のことが見えるが、『今昔物語』には母のことは一言もふれてゐない。

(4) 『發心集』には證空を説明して、空也上人の臂の折れたのを餘慶が祈り直した禮に、上人の奉つた小童としてゐるが、

『今昔物語』には、このことは一切見えない。

と云ふ具合で、『發心集』を『今昔物語』からの直接の傳承と認めることは出来ないのである。

### (七) 母子三人賢者遁衆罪一事

この説話と同一内容のものとしては、他に、

○『沙石集』第三下(六)「小兒之忠言事」の中の魯州の母子三人の話

○『私聚百因緣集』卷第九ノ第九、一門三賢ノ事兄弟並後母慈悲

○『三國傳記』卷第一ノ三十、母子三賢事

等があり、内容的に見て、『今昔物語』・『沙石集』・『私聚百因緣集』が(A)類、『發心集』・『三國傳記』が(B)類をなすことは、

(1) 殺人の原因を、(B)は兄の妻が犯された爲となし、(A)は母が辱しめられた爲とする。

(2) 殺された者を、(B)は朝夕公に仕へる權力者とし、(A)は酔つた隣人としてゐる。

(3) (A)に於ては、母が過は我が身にありとして罪を負はうとする話が存在するが、(B)には之が缺けてゐる。

等によつて諒解することが出来る。又、『今昔物語』と『沙石集』は、これを震旦魯州の話とするに對し、『發心集』と『三國傳記』は本朝の事としてゐるのも、大きな相違である。『私聚百因緣集』は、之を本朝の事を蒐めた卷第九に収めながら、冒頭の、

義士遇赦。曾有二義士兄弟二人。

及び、文末の

時王云。一門有三賢<sup>レ</sup>室有三義<sup>レ</sup>二哉。即隨喜<sup>ニ</sup>赦也云々。

によつて、原典が漢文であることを示し、この説話が『今昔物語』・『沙石集』所收の系統のものから、『發心集』・『三國傳記』所收の系統のものへの移行過程にあることを察せしめるのである。かくのごとく、この説話は、支那原流の説話が本朝のものに轉化して行くあとを見得るのであるが、當面の問題たる『今昔物語』と『發心集』との關係は、直接的傳承とは認め難いのである。

### (八) 惠心僧都隨母ノ心遁世事

惠心に關するものとして、『今昔物語』には、

(1) 卷第十二ノ第卅二、横川源信僧都語

(2) 卷第十四ノ第卅九、源信内供於横川<sup>ニ</sup>供養涅槃經一語

(3) 卷第十五ノ第卅九、源信僧都母尼往生語

の三條があり、『發心集』には、

(4) 卷第七(76) 惠心僧都謁<sup>ニ</sup>空也上人<sup>ニ</sup>事

(5) " (84) 惠心僧都隨<sup>ニ</sup>母心<sup>ニ</sup>遁世事

の二條が存在する。

惠心は高名の僧であり、従つて、その傳記説話を記すものは『大日本法華經驗記』・『續本朝往生傳』・『私聚百因緣集』・『三國傳記』等頗る多いのであつて、『私聚百因緣集』・『三國傳記』と『發心集』との關係については、『中世日本文學序説』の中に述べておいた通りである。(註五)

ここには、『今昔物語』と『發心集』との關係に限つて考へ度

い。(3)と(5)とが接觸面を持ち、内容としては、(5)が(3)の冒頭の部に當るのであるが、『今昔物語』の方が「三條ノ大后宮御八講」を契機として説話を展開してゐるのに、『發心集』の方は、

然る可き所に佛事しける導師に請ぜられて、布施など多く取給ひたれば、いとうれしくて、即ち母の許へ相具してわたり給へり。

として居り、又行文の比較によつても、『發心集』が『今昔物語』の一部分を抜き出して一つの項目を立てたとは、必ずしも断定出來ないのである。

『發心集』の方は、頗る簡單に母の教訓と恵心の遁世の動機を述べたので、特定の文献からの抄録と云ふよりは、むしろ口誦流布の説話を直かに書きとどめたと云ふ趣があり、『今昔物語』との直接關係はこれを否定すべきであると思ふ。

以上、『今昔物語』と『發心集』と説話内容に於て近似乃至類同と思はれるものをとつて、その一々について、直接の傳承關係が認められるかどうかと云ふ點を問題として、考察を加へてみたのである。

その結果は、頗る消極的結論しか出なかつた。『今昔物語』が中古に於ける一大説話集たる位置と、『發心集』の中世初頭に現れて爾後の諸説話集の淵藪たる位相とから考へて、一見『發心集』が『今昔物語』をその典據としたものが多からうと想像され易いのであるが、之は全く否定されるべきであることが判明したのである。八條中、全くその無關係を證し得るもの五條、やや相關係す

るかと思はれるもの二條、或は直接の典據となつたかもしれないと思はれるもの一條と云ふ具合で、かかる綜合的結果から見直すと、その類似を思はせる二條(4、8)は勿論、直接するかに見える一條(5)の如きも、むしろ之を否定する方がよいのではないかと思はれる。と云ふ理由は、『今昔物語』が『發心集』編者の座右にあつて、その資料として用ゐられたと假定するならば、兩者の類似説話に於て、その内容の傳承が明白に露呈する筈であらうと思ふのである。又、よしんば原典をそのまま引抄することはなくとも、承述の態度に一貫したものが現はれて然るべきであらうと思はれるのである。しかるに、今見つけた所では、さうした跡が全く認められないのであるから、その近似の二條は勿論のこと、最もよく似た一條も、之を直接傳承ならずと斷すべきである。(註六) 即ち、『發心集』編者は、『今昔物語』を編纂の資料としては採用しなかつたと考へるのである。

註(一) 拙稿「三國傳記出典考(一)」——發心集と關係ある説話について——(拙著『中世日本文學序説』所收)の(一八)參照。

(二) この長増と『法華驗記』中第五十六丹州長増法師とが同一人か否かは未だ考へ得ない。又、拙著『校註鴨長明全集下卷』九頁に、淨眞を無量壽院第五代の淨眞阿闍梨と同一人の如く記したのは、失考であつた。年代から見て明かに誤謬であるから、その脚註は抹削して「傳未詳」と改める。

(三) (1)『今昔物語』卷第十九ノ第廿四、代師入三太山府君

祭都状「僧語

- (2)『發心集』卷第六ノ第一(63)證空阿闍梨替「師命」事

- (3)『寶物集』卷第三、不動明王付證空本尊應驗の事

- (4)『雜談鈔』十一、泣不動ノ緣起ノ事

- (5)『三國傳記』卷第九ノ第六、三井寺智興内供事

- (6)流布本『曾我物語』卷第七ノ第七、三井寺の智興大師事、第八、泣不動事

- (7)謠曲『泣不動』

- (8)『園城寺傳記』卷第六、泣不動事、依「不動靈通」出甘泉「事

- (9)『寺門傳記補錄』卷第八、不動堂、南院、卷第十五阿闍梨證空常住院

- (10)『元亨釋書』卷第十二、釋證空

- (11)『證空繪詞』

- (四)拙稿「泣不動の説話」(拙著『中世日本文學序説』所收)

- (五)拙稿「私家百因緣集出典考——發心集と關係ある説話

について——」(拙著『中世日本文學序説』所收)

拙稿「三國傳記出典考(一)——發心集と關係ある説話について——」(同前)

(六)片寄正義氏はその著『今昔物語集の研究』上、第五章「今昔物語集傳本考」第六節「所謂津輕本今昔物語について」に於て、今昔物語卷第十九ノ第十六として津輕家所藏卷子本を採用したことに疑ひを加へ、「發心集が津輕本の如きものを簡潔にしたとは考へられない。而して發心集は鎌倉初期の成立かと思はれ、津輕本はこれらをもとにして増補したのではあるまいか。津輕本の書寫年代についてみても、かく推定することは強ち不都合なことではない。」(二二〇頁)と云ひ、又「現存資料の範圍では津輕本は發心集と最も近い關係にあるが、或は發心集以外の類似説話集の殘缺であるかもしれず、又獨立して單獨に傳へられた小話であるかも知れない。」(二二一頁)としてゐる。この條を『發心集』から出たものと斷ずるには未だ確證が乏しいが、『今昔物語』本來のものに非ずとする考へには賛成したい。